

大山村民の江戸での座り込み  
 1741(寛保元)年12月19日

江戸時代は支配者である武士が、住民たちを困らせて、苦しい生活を強いることがたびたびありました。時代劇では、住民たちが泣き寝入りをする

こともありますが、実際の江戸時代の人々は私たちが想像する以上にたくましく、不正に対しては断固とした姿勢で臨んでいたようです。実際に残る史料でも、大山村(現：大字大山)の住民が領主に抵抗した様子が残されています。

今からさかのぼること264年前の1741年12月、徳川吉宗が將軍であったころの事件がおきました。このころの大山村は、旗本の小出鞠負(ゆきえ)

の領地でした。江戸時代は、米の一定割合を年貢として徴収する方法が一般的でした。この年貢高を決定するに際して、米の収穫前に役人が作物の生育状況を調査して、年貢高を決定します(これを検見といいます)。この方法だと、凶作の場合税収が減ること



現在の赤坂御門周辺はビルが立ち並び、門跡の石垣が残るのみです

になり、領主にとっては、収入が減ることとなります。

実は、1741年の検見に際して、大山村の領主小出鞠負は不当に収入を得ようとし、不正をしたことから、大山村の農民は怒りました。作物の生育状況に合わない年貢を課せられることは、現在でいえば、収入に合わない税を課せられることを意味し、生活にかかわる問題となります。このよう

な大きな問題に直面した大山村の農民は、一同会合し、そして自分たちの意見を領主に直訴することでもとまり、暮れが押し迫る12月19日に大山村百姓二郎左衛門以下10名が、一路、江戸赤坂御門(現：東京都港区)に近い小出邸に向けて出発しました。江戸に着いた一行は、領主に直訴するものの、取り合ってもらえず、真冬の中、領主邸前に座り込みを行ないました。そして、12月25日ようやく訴状が受け取られると、12月29日に直接訴え理由が聞かれたのでした。

現在に生きる私たちには理解できないかもしれませんが、生活をかけた彼らの訴えは必死であり、そのことが、このような行動につながったのです。私たちの生活がこのような先人の苦勞の上に成り立っていることを決して忘れてはなりません。

年の暮れ徐々にせわしなくなる歩幅

石田 大島笑太郎

柿の実をきれいな色にする夕陽

石田 柳田 政孝

普段着の似合う私の腕まくり

上町 上野 広江

あせらずに行けと教える秋の雲

上蒲生 菅原 妙子

どれほどの痛さだろうの活け作り

三村 上野久美子

短日の日暮れに時計追いつけず

石田 柳田キミ子

雑草の強さに負ける足と腰

大町 大八木トク

終い風呂みんなの夢の中へ出る

石田 稲葉 ケイ

井の中の蛙バイトでたくましい

上蒲生 渡辺 文子

老いの坂道へ人生来てしまい

石田 大塚 ナカ

強い腰喉越しもい蕎麦どころ

上蒲生 菅沼 マサ

押し花が色鮮やかに額で咲く

上蒲生 柳田 智江